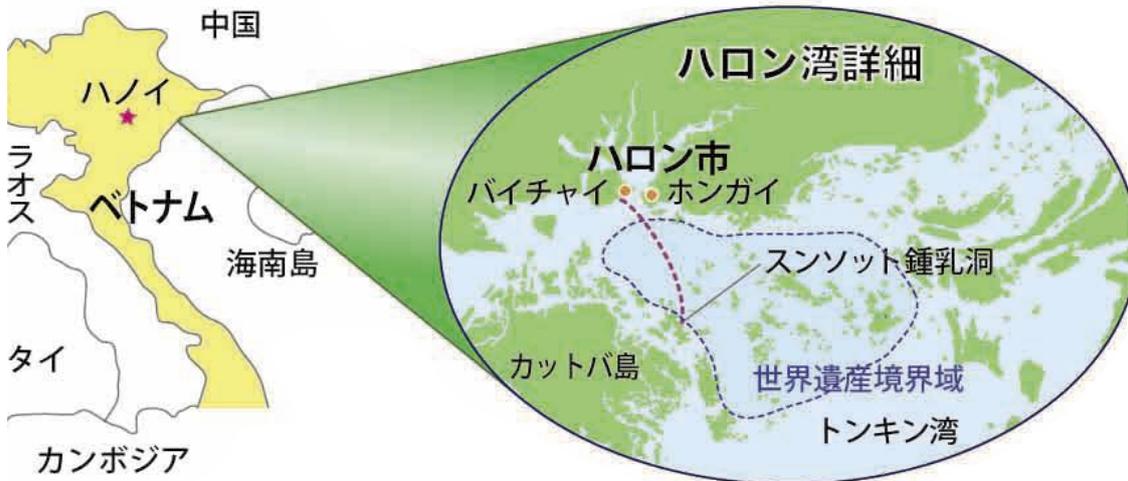


2004年のお盆休みを利用して、ベトナム観光に行った。旅行プランは、ベトナム人留学生のタンさん(わんりい 90号、またはホームページのベトナム料理の項参照)に依頼して、ハノイの観光会社に組み立ててもらった。タンさんは、根気よく旅行社と我々の調整をしてくれた。とても感謝している。駆け足の旅だったが、変化に富んだおもしろい旅だった。

ベトナムは長く中国の支配を受けたので、漢字の語彙が浸透し、ベトナム語の7割くらいは、漢字に置き換えられるという。しかしフランスの植民地時代にアルファベット表記になり、街角には漢字はほとんどない。ベトナム人の深層には漢字を使っていると、いつか中国に飲み込まれる心配が……と、ベトナム関係書にあり、なるほど。朝鮮韓国も、漢字を捨てた背景の一つに同じような理由があると思う。島国の日本では理解しにくい心情であろう。日本は、知的財産である漢字を無料で使っていると、ある本(日本人著)に書いてあった。



湾内の景色を楽しみ、鍾乳洞を持つ島を訪ねるのが普通だ。

乗り込むと、客室の船尾に近い隅にはミニバーがあり、その先の突き当たりのドア越しに見える部屋は、キッチンようだ。中で若い女性がしゃがんで野菜をいじっているのが見えた。ランチの準備か。

バイチャイの船着き場から、アンさん(ガイド名)に導かれて、目的の船に向かう。しかし、手前に他の船が密集して停泊しているので直接行くことができない。まずよその船に乗り込み、その船の甲板を棧橋代わりに歩いて、手すりを乗り越え、我々の船、[太陽号]にたどり着いた。他人の庭先に侵入した気分である。乗り込んだ船内の様子は、列車1両分のボックス客席がテーブル付きで6人掛けになっているものと思えばよい。真ん中を縦に貫く通路をはさんでテーブルが左右に並び、30人以上は楽に座れそうだ。他の乗客は誰もいないので、先に良い席を取ってしまおうと、さもないことを考えていると、我々6人の貸し切りだと知らされた。気分はエコノミーツーリスト心得から、海運王持ち船クルージングに格上げになった。

ご存じの方も多いと思うが、ハロン(漢字表記は下龍)湾は「海の桂林」ともいわれ、浸蝕された石灰岩の小島、約3,000が海上に林立して、異形の景観を展開、ベトナム北部の観光ツアーに必ず組み込まれる場所だ。

船で何泊も過ごすコースもあるが、大多数の観光客は、日帰りで訪れて、移りゆく

8時20分。落ち着くひまもなく出港の気配なので、荷物を座席において上のデッキへ出る。操舵室の前がデッキになっていて、布張りの日よけが、デッキ面積の半分くらいを覆い、その下にテーブルが1つと、デッキチェア2つ、そしてベトナムによくある、頼りないプラスチックの椅子が数脚散在している。我々は、デッキのへりに張り付き、出港の場面を逃さないよう、型どおりの観光客を演じた。

出港直後は、他の船の間を縫って航行する神経を使



典型的なハロン湾の風景。湾内なので海は穏やかだ

う場面なのに、気が付くと我々が操舵室からの視界を妨げていた。あわてて、操舵室の前面から脇によける。両脇に寄ればOKよ、と身振りで見え、若いキャプテンがこちらに伝達。彼の後ろの壁際には、たたんだ布団が丸見えで、布団部屋兼用のような操舵室だ。ここで寝泊まりするらしい。

やがて陸地が遠くなり、ぐるりが明るい穏やかな海面になった。軽快に船は進む。側面も進行方向もダルマの背比べといった感じのニョキニョキした島影がほどよい間隔で切れ目なく並ぶ。島に包囲されて、外海への水路があるとは思えない。海面を進むにつれ気分は高揚し、気持ち大きくなる。やや暑いのが欠点だが、甲板に座ってくつろぎ、ゆっくり変わる景色を眺めるのが心地よい。この船の機関音はさほどやかましくなく、大声を出さずお互いに会話ができるし、無言でいるときの機関音は眠気を誘う。冷えたビールを注文すると、数本のビールやコーラをトレイに乗せてデッキまで運んできた。こんなにたくさん頼まないぞ、と思ったが、栓を開けなければ良いのか、と納得してビールを味わう。

ふと操舵室を見ると、船長は布団の上に横たわり、雑誌を見ている。舵輪の操作は、起用に器用に足を使っていた。彼にとって海の仕事は、日常の世界なのだ。別の場面では、船の若い女性と楽しそうにふざけ合っているのをしばしば見掛けたが、うらやましい職場だ。

行き交う交通量はかなり多い。船首に龍の飾りを付けて併走する観光船を追い抜いたし、後ろからも観光船らしき船影がいくつも見える。ときおり、平底の船が我が船の進行方向を直角に横切る。アンさんによれば、ハロン湾周辺は良質の無煙炭産出地になっているので、石炭運搬船の航行が多いそうだ。左右からほぼ同時に現れた2隻の船があった。両船の航跡を延長すると、数分後には[太陽号]の前で衝突だ。しばらく見守っていると両船とも衝突回避のために針路を変えたりはしない。海上の見えないレールに乗っているみたいに、真っ直ぐ自分の方位を頑固に突き進む。果たして結果いかにと、少し期待して見届けると、不思議や、ちょっときわどいがうまくすれ違う。安堵、落胆が相半ばで、やれやれ。

ベトナムでは、路上交通、海上交通ともスリリングだ。



我々の船「アンズン号」の甲板、後ろに見えるのが操舵室。



観光船と、物売りの小舟。小舟は、体の向きと進行方向が同じだ。

法規で縛るより、各自の責任において行動する割合が多い。今乗っている船にしても、日本であれば細かく規則をつくり、操舵室の前に乗客を入れるなどか、膝上ぐらいの手すりは胸ぐらいの高さにしろ、などと規制されるだろう。しかし船旅は、そういう規則がないほうが開放感があって楽しい。安全と楽しさは反比例するようだ。

10時過ぎ、一群れの小島のそばに近付いてから、「海上市場」を船から間近に見るようになった。いくつかの「海上市場」とは、商品の魚介を入れる生け簀と、住居用の構造物が一体となって海上に店を構えるイカダ状のものだ。住居部分は、ドラム缶のようなものを浮き材とし、材木で大きい井桁を組み合わせたものを基礎としている。屋根と腰高までの手すりがある、裂いた竹で作った10畳ぐらいのテラスと、その隣に周りに壁で囲まれた寝室から構成されている。その住居は竹床のすきまから、海面が見えて風通しがよいし、外からホコリが入ったりしないので空調衛生面では理想的だ。掃除をするときも、海へ掃き出せばよい。しかし海上で暮ら



水上市場、左奥が住居部分。手前に少し見えているのが、生け簀である。



景色を観ながら楽しいランチ、テーブルセットができた。

すとなると、二の足を踏む。ちょっと散歩には行けないし、ほとんど海面すれすれの場所に昼夜寝起きするのは、心理的緊張感がある。彼らとしても、思いは同じらしく、ベランダの板壁には街並みの輪郭を描いたつたない絵があった。絵によって孤立感を緩和するつもりなら、いじらしい。地震には絶対に強いと思うが、このあたりは地震は無いという。

地域として、海の商圈に入ったのか、1人乗りの小舟を巧みに操るおばさんが、忙しそうにそばを通る。普通のボートの進み方とは逆で、進行方向と体の向きが同じだ。この暑さなのに、オールを切れ目なく動かし、ミズスマシのようにスイスイと進む。ベトナムのおばさんたちの活力には敬服する。

10時過ぎ、たくさんの観光船が停泊している、目的のボホン島に着いた。小島の栈橋に接岸して上陸、鍾乳洞に向かう。アンさんの後について、鍾乳洞の入り口に続く坂道を登った。まわりは熱帯性の植物が繁茂し、

かなり蒸し暑い。入場料を徴収する木戸があり、アンさんが1人30,000ドン(約240円)を支払い鍾乳洞に入る。

この鍾乳洞はハロン湾において最大で最も美しいそうで、名前をスンソット鍾乳洞という。スンソットとは、ベトナム語で「びっくり」だそうだ。にぎやかな中国人観光客に圧倒されながら、巡回見学コースを行くと、「びっくり」だけあって、驚くほど広い空間の鍾乳洞だ。珍しいと思ったのは、天上の一部が、夏の雪渓に見られるようなスプーンカットのデコボコになっていることだ。海上の鍾乳洞の特徴かとも思ったが素人ゆえよく分からない。普通、鍾乳洞の中は冬は暖かく、夏は涼しいものだが、ここでは外気温よりやや温度が低い程度で、かなり暑い。アンさんは、得意げに「冬は暖かいです」といったが、今は夏なので、そう聞いても感銘は受けなかった。鍾乳洞内部の詳細は、私の文章力ではうまく伝えられないほど素晴らしいが、一度見れば十分である。ほの暗い鍾乳洞を一巡りして外に出ると、まぶしい日ざしの中、青い海に突き出た島々が広がっていた。

再び太陽号^{アンズン}に乗り込み、往路を戻る。一通り景色が分かってしまったので、来るときほどは、わくわく感がない。従って帰りにランチの楽しみがあるのはよい工夫だ。

途中で「水上市場」に立ち寄り、食材を仕込む。これは、ランチのメニューに加えてもらえる。我々はワタリガニを仕入れた。本式に、テーブルがセットされた。コップに入れたナプキンまであるのは、嬉しい。観光客を喜ばせる、雰囲気作りが上手だ。船の中ゆえ、手の込んだものはできないが、オーナー主催のランチの気分である。我々6人に対して、お姉さんが3人も付くのだ。ワインを頼み、食事に熱中していると、知らぬ間に天気が変わっていた。鉛色の空、風、波立つ海面、激しいスコールである。見えていた島々が、ぼんやりした灰色のシルエットになる。建て付けの悪い窓枠から、多少の水しぶきと風が吹き込むが、船内は天国だ。

予定の食事を済ませると、船内はレストランから、おみやげ屋さんに変更。お姉さんが、箱形のケースから主に装飾類の商品を見せた。無理に買わせようとしてもいないが、こちらでも楽しく冷やかす。腹は満腹、頭はカラッポで船旅の余韻にひたっていると、12時過ぎ、バイチャイの船着き場に到着してしまった。

ハノイ(漢字は「河内」)は、中国雲南省を源流とする紅(ホン)河の広大なデルタ上にあり、漢字表記のとうりまさに河内だ。車で移動するとハノイ近郊の水田の広さに圧倒される。この豊饒の地が、日本軍が関係したために200万人の餓死者を出したという歴史を、うかつにも、ベトナムへ行く前の“知識にわか仕入れ”で初めて知った(「ベトナム“200万人” 餓死の記録」早乙女 勝元)。日本軍は関与しないという異論もあるが、事実として受け止めたい。現在のハノイには、街道沿いの随所に戦勝記念碑はあるが、アメリカとの戦いの痕跡は全くない。星一つの国旗は私には、サッポロビールの兄弟分のようにも見えたが、簡潔で勇ましくてよい。そして、星一つの国旗がひるがえる、公官庁の建物はほとんど新しく、色調は揃って褐色であったのが印象深い。同行のSさんは「官庁カラー」と名づけた。また、通りがかりに、門塀付きの立派な館があり、ガイドのアンさんこれは何かと問いかけると、「銀行」といわれて驚いた。

■高速道路

ベトナムにも高速道路があり、おかげで、ハノイ、ハロン市間の所要時間が大幅に短縮された。観光客は日帰りで観光できるようになった(日本の観光地と同じだ)。以前は、道路も悪く、幾つかの河を渡るのがフェリーであったため片道6~7時間もかかったという。

ベトナムの高速道路は稀にだが、なんと横断歩道があり、むやみに飛ばすことはできない。横断歩道の標識が現れると、その先の路面が洗濯板状の凸凹になり、車を強制的に減速させる仕掛けだ。

高速道路の料金所は2段構えだ。まず最初は窓口のある交番風の小屋で、通行証のようなものをもらい、すぐ先にある遮断機付きの料金所で所定の料金を支払う、すると係員が手元の電動ボタンを押す、そして遮断機が上がる。遮断機の上がる様は、「人力ETC」といったおもむきだ。一連の仕組みには5人ぐらいは要する。少しの仕事も、皆で分け合っているのかしら。

■バイク

我々の旅は、前回紹介したハロン湾観光のあと、ハノイまで移動し1泊する。ハロン市の船着き場から、激しく雨が降る中、専用車のベンツワゴンで、ハノイへと向った。傘を差して行く自転車や、バイクの人たちはずぶ濡れだ。カッパのような物を着用する人もいたが、どこまで役立つか？

公共交通機関の貧弱なベトナムでは、バイクは必需品で、特に日本製が尊ばれている。近年は中国製が日本製の半値近くで進出しているが、日本製にこだわる人が多いそうだ。従ってバイクは多い。中にはバックミラーのないものや、ヘルメット無しの人もいる。

道路はバイクの見せ物場だ。彼らは曲芸のように何でも乗せ、旅行者を驚かせる。バイクに子供を含む5人も乗っているのを見たり、2人乗りバイクの後ろの男が自転車を両手で横に掲げながら走行するのを見た。持つより、自分で自転車に乗った方が疲れないの

にと思ったが……。バイクの後部に、生きて縛られた豚を2枚、座布団のように重ねて運ぶのを見た(あの状態は2匹ではなく、2枚だ)。座布団ふうに重なった豚さんの有様は悲惨であった。バイクはトラック代わりで、家具や動物をも運んでしまうのだ。

ハノイに近づくと雨はやんだ。のんびり走る自転車や、ポンコツトラックを順に抜き去る。道路は2車線でかなり広く、対向車があっても追い抜きと、すれ違いとを同時にできる。追い越しの目標が大きい場合は、対向車線のスキを見て抜く。我がベンツが追い抜く車は、よほどのろい車だけだ。逆に後ろから来る乗用車にはほとんど100%抜かれた。

ドライバーのAさんは、30歳代見当の好青年で、容姿はややぽっちゃり型、運転は非常に慎重だ。運転免許のない私でさえ「のろいなー」と思うことがあり、速度計をチラチラ盗み見すると、一般道では早くても40~50km。遮るものもない直線道路でも速さは変わらない。だからといって、運転が下手なわけではない。車幅すれすれの路地を、針の糸を通すように、すり抜けたともあったし、割り込んだ他車との衝突をとっさの判断で避けたこともあった。ベトナムの道路は、速い車、遅い自転車、さらに遅いヒト、方向の予測ができない水牛、など移動するものが雑多である。彼のよ



ハノイの道路を埋め尽くすバイクの群、朝の通勤ラッシュ



活気溢れるハノイの路上市場、おなじみアジアの風景

うな運転態度が一番よいのであろう。

ハノイへ行く前に寄り道をして、陶器の村「バッチャン村(漢字は「八長」)」へ寄ることになった。

■葬列

車は幹線道路を離れ、水田のあいだに人家や商店が点在する、ハノイ郊外の狭い路を進んだ。とある村落で思いがけず、葬列の人混み遭遇して立ち往生となった。車から前方を見ると、棺桶を乗せた飾り車を人力で引き、そのあとから、参列者が徒歩で続いている。喪服とか、黒い服装の人はなく、ここでは皆、普段着のような白っぽい服装である。アンさんの説明だと、飾り物でそれと分かる、独身の若い男性の葬儀だそうだ。野辺送りの人々の後ろから、ノロノロと進むより仕方がない。他にも前にいる車や、対向車もあり、人と自転車、バイクで大渋滞になっている。動いている時間より、止まっている方が長い。かなり長く葬儀の列付き合ったが、彼らは横道に逸れたので、混雑からやっと抜け出し、バッチャン村に着いた。異国の葬儀は旅行予定にない社会見学になった。

■バッチャン村

旅行前のにわか予備知識によると、ハノイ近くの各村は、米作りの他に、古くから一村一品の特産品を作ってた。そして、できた特産品をハノイで売って現金収入を得ていたが、ドイモイによる観光化によって、土産品になるような雑貨品に限り脚光を浴び、版画はドンホー村、陶器はバッチャン村といという具合に観光客が周知するところとなった。

着いてみるとなるほど、陶器の村である。道の両側に陶器店が軒を連ねている。けれども、こういう場所は、日本にもあるので、景観としてはそんなに珍しくはない。値段が安いのと、ベトナム風のデザイン、色づかいが受けるのであろう。トンボを図案化した品物が多く目に付いたので、トンボにはなにか意味がある

のかと、店員に訊いてみた。すると、

「日本人に受けるので」

という返事が来たのには、拍子抜けした。縁起物の由来話でもあると思ったのだが、「日本人＝トンボ好き」というのは、ベトナムで初めて知った。陶器は重いし、粗雑に扱おうと割れるのでたくさん買えない。同行の女性たちは、慎重に品定めして少量買ったようだ。日本に帰ってから、気を付けてみるとバッチャン焼きらしき物を、雑貨店でよく見掛けた。

■ハノイ

ハノイには日程の都合で、2日目と4日目にそれぞれ違うホテルに泊まった。どちらのホテルも、フランス仕込みのせいか、お風呂の水はけが悪かったりとか、冷房が効かないなどの不具合はなかった。当たり前のことだが、嬉しいことだ。あとで知ったが、風呂のお湯が出なかった部屋があったそうだ。

ハノイの街は枝もたわわな巨木の並木が美しい。ただし道路は流れるオートバイの大河で恐ろしい。交差点に信号が無いところもあり、我々「イナカモノ」が、道路を横断するのは覚悟がいる。同行の知恵者、Yさんが云うには、「オートバイの流れの方向にやや斜めに横切る。歩調は一定、途中で立ち止まらない」のがコツだそうだ。そういえば登山などで、橋のない沢を渡渉するときも、川上から川下に斜めに渡るなあ、と納得。しかし彼から、「横断の術」を伝授されても1人では道路を横断する度胸がないので、Yさんを先頭に、全員でこわごわ渡る。オートバイが最初にぶつかるのは先頭のYさんだろう、という読みがある。

歩道の縁石を離れ、オートバイの流れに、くさびを入れるかのように分け入る。なるほど、相手のほうから回避してくれる。早く渡りきりたい気持ちを押さえ、一定の速度を保つ……。渡ったぞ。緊張で、不必要のアドレナリンが大量に分泌されたに違いない。

渡りきってからYさんが、

「横断中、オートバイが来る側の腰骨のあたりがムズムズした」

と本音を吐いた。オートバイ運転者が、よそ見をしたり、今日のおかずは何だろうなどと考えていたら、こちらは轢かれしてまう。

大きな交差点で信号が変わり、止まっていた何列ものオートバイが一斉に発進する様は、青梅マラソンのスタートのようで壮観だ。

ベトナムは、さらに経済発展すれば、もっと車が増える。今のままでは、バイクと車が道路上を入り乱れ、混乱する。将来、両者の分離が必要だと感じた。

ガイドのアンさんは云った。

「ここからバイク・タクシーに乗ります」

女学生なら「えー！ウッソー！」と叫ぶ場面だが、中高校の我々は、突然のお告げで言葉が出なかった。

バイサン(地名) 船着き場から足場の悪い坂道を登ったところにある赤土の広場に、数人の若いドライバーがそれぞれのバイクにまたがり、待ちかまえていた。それぞれヘルメットをかぶり、愛車のエンジンを吹かして、我々を値踏みするような眼差しで見つめている。バイク・タクシー！、これも面白そうだ。

朝、ハノイのホテルを8時30分出発出発のときは、ずーと車で行くと思っていた。事前に知らされている当日の行程は、ハノイから西南約150キロのホアビン(平和という意味)省のマイチャウに移動、タイ族のラック村でゲストハウスに宿泊する予定だった。

しかし前夜、ハノイのホテルでガイドのアンさんは妙なことを云っていた。

「荷物はこのホテルに預けることもできます」

我々：「???… 車に積んではいけないのですか？」

アンさん：「それでもいいです」

といったやり取りがあって、問題のトランクはあまり気にせず車に積んでしまったが彼が云った意味は、やがて判明した。事前にチェックしたマイチャウに関するインターネットの記事には、一貫して車だけで行くように書いてあったが、別の経路もあったのだ。

紅河の大支流、ダー河(大河?)にホアビンダムという巨大ダムがある。旧ソ連の援助によって1979年着工、1990年完成だから、完成までに10年以上の歳月を要した大工事である。このダムの完成によって、ハノイの電力事情は大いに改善したという。ダー河をせき止めたので大きなダム湖ができ、多勢の人が立ち退きをしいられたであろう。このダム湖に定期船が運航していて、我々一行はその船を利用してマイチャウへ行く手筈になっていたのだ。

ハノイを出るとだんだんと田舎の景色になり、さらに山沿いの狭い道を進むと、そこは崖崩れとなっていて通行できなかつた。仕方なくダー河のダムのほりに出でる迂回路をとった。着いてみるとダムは雨期のため、巨大な放水路から褐色のしぶきを上げて放流していた。放水路の下をうがったトンネルを抜け、日本のダムにもよくあるような、ダムサイトにある休憩所兼売店のそばに車を停めた。

この場所にはバスで来たベトナム人観光客も何人かいて、ダムを見物していた。これより奥の路は、外国人は通行証がないと通行できないという。ダムの管理事

務所に代表者のパスポートを提示して、許可証を作ってもうこととなり、アンさんは我々に待つようにと言い残して運転手と共にダム事務所へ去った。

その間我々はトイレを使ったり、ダム見物、売店で慣れない「ドン」での買い物をした。30分ほどしてアンさんが道案内の若い女性を伴って帰ってきた。女性はタイ族で、普段は発電所のガイドをしているという。

全員車に乗り込んで出発。ダムをめぐる登り勾配のきつい道路を抜けると、ゲートと警備所の建物があった。ダムは重要軍事拠点なので、警備が厳しい。詰めで若い警備員(軍人)に案内の女性が書類を提示して、ゲートを開けてもらう。ゲートから先の路は、ダム湖を支えている巨大な堰堤上を通り抜け、やっと湖と対面。少し湖沿いに走しり「船着き場」に着いた。

船着き場といっても名ばかりで、屋根もなければ棧橋もない。遊覧船のような船が一隻、赤土の崖下の岸辺に接岸しているだけである。車を止めるとアンさんが言った。

「車はここまで、ここから船に乗ります」

「えーっ？」

この場所に来て初めて、車を捨て、船に乗るということを知る。それまでは岸辺に船は見えていたけれど、我々とは関係ないダム見物の遊覧船と思っていた。

さらに、

「スーツケースは持って行けません」

と宣告。船が小さいので、スーツケースは持ち込めないそうだ。前夜ハノイのホテルで荷物を預けるかどうかと聞いてきたのは、このことだったのだ。私は、スーツケースを携行できないことは、前日にはっきり言ってくれないと困る、と抗議した。アンさんとしては、説明したつもりのようなのだが。彼の本業は、大学院で東洋史を研究する学士さんで、日本語の文献を読みまくるのは慣れているが、言葉での日本語でのやり取りをす



ダー河をせき止めたホアビンダム。放水中路の下に道路がある。



乗ってきた高速船と、到着したバイサン船着場



バイクタクシーを連ねて移動、この写真は帰りのとき。往路はいきなり乗ったので撮影する余裕がなかった。

るのは難しかったのだろう。専門の日本語ガイドだと、いつも日本語を使うので、言い回しがうまくなり、伝達が行き届くが、彼のような臨時のガイドは、ふだん日本語を使わないので細かいやり取りは難がある。こちらも、突っ込んで聞けなかった責任はあるが。

私の荷物は、中型のリュックサック一つだったので荷物を仕分ける必要は無かったが、スーツケースで移動していた他の5人は、大あわて。マイチャウまで携行する品物と、車に積んだままのスーツケースに残すものを炎天下の地面にかがみ込み、大汗でより分けた。やっと荷造りができて、土手下に停泊している船に向かう。

頼りない渡し板で船に乗り込むと、うしろが機関室、前方が40人ぐらい座れる客室で、すでに4列並びの席が7割方うまっていた。一見、高速船ふうのしゃれた船体だが、だいふ年季が入っていて、働き盛りの、おばさんといったかんじだ。冷房はあるのだが、ほとんど効かない。窓がはめ殺しのうえ、天井の鋼板が陽にあぶられ、とても暑かった。欧米人らしい白人青年のほかは、ベトナム人ばかりで観光客はいなかった。

着席するとまもなく、白い制服を着た青年が、料金を

集めに来た。切符はなく、紙幣の受け渡しで「ヨシ」という仕組みだ。1人3万ドン、我々外国人は5万ドン。この差は何だとアンさんにからかい気味に聞くと、もしもの事故があったとき、補償額が違うのだそうだ。困みに通貨単位の「ドン」とは漢字表記で「銅^{ドン}」。昔は銅貨が主流だったことから名づけたものという。

13時15分出航、走り出すとすこぶる快速だ。モーターボートのように舳先から水しぶきをさかんに飛ばす。暑ささえなければご機嫌だが、いささか空腹になってきた。道路の崖崩れのため遠回りをしたり、ダムでの通行許可証をるのに手間取ったので、昼食を食べそこなってしまったのだ。

茶色の水面がどこまでも続く巨大なダム湖だ。湖の背後には灌木が茂るかなりけわしい山なみが平行する。見えている山野は、ほとんど無人地帯だが、山肌には耕作したような跡も見えた。あとで簡単な観光地図ではかると、長さが約180kmはある。日本の琵琶湖の長辺が約60kmだから、その巨大さが実感でききよう。

船は1時間ほど、湖を高速で走り、(私の計算では約38km)「バイサン船着き場」に到着した。湖は、なお上流に果てなく続いていたが……。この船着き場は浮き桟橋で、その上に天幕付きの屋台が左右に1軒ずつあった。暑さと空腹で、意識がぼーとした状態で船を降りると、予備知識無しで「バイクタクシー」と向き合うことになったのだ。

アンさんだけ知っている事前の計画では、「バイサン船着き場」からは別のワゴン車でマイチャウのラック村まで楽々に行くはずであった。ところがこの地でも途中の道路が崖崩れで、車両は通れなくなっていた。現地担当者の機転で、急遽バイクタクシーが勢揃いし、我々を出迎えたわけである。アンさんもバイクタクシーに変更になったことは知らなかったようだ。

全員、乗るべき相方のバイクが決まり、爆音けたたましく、異境の村々を通り抜ける。ドライバーは全員ヘルメット着用なのに、乗客の我々は防備無だ。アンさんがドライバーにゆっくり走るようにと、いいふくめてあるので、怖さはなかったが、座りこちが不安定であった。Sさんや、Y婦人を乗せたドライバーは、しっかり抱きつかれてさぞ暑かったと思う。やがて、崖崩れの現場を通り過ぎ、出迎えたワゴン車に乗り換えて、タイ族の「ラック村」に午後3時に到着した。

■多民族国家

ベトナムは多民族国家で、おおよげに認められているだけでも54民族が暮らしている。最も多いのが「キン族」で全人口の90%を占め、普通にいうところのベトナム人だ。彼らは中国南部から移住したという。受け売りによれば、「キン=京」のことで、都会人つまり、山岳部には住めない民族と自らを定義している。

今回訪ねた「マイチャウ」はタイ(Thai)族の村だ。他にタイ族(Tai)もあり、同じものと思っていたが、別であった。タイ族は山間部の平地に住み、主に稲作をして暮らしている。

日本で読んだ、ガイドブックでは、ベトナムの田舎では、虫除け薬、虫さされ手当の軟膏は必携と書いてあったが、ハエ、蚊などは、少しはいるが気になるほどではなかった。もともとこの程度なのか、季節がずれると多いのかは判らない。6、7月の新潟あたりの山に比べれば、ずっと快適といえた。

■ゲストハウス離れ

さて、オートバイを連れ訪れたタイ族の村落「ラック村」には、2004年8月14日午後2時50分に到着した。そこは四方を、けわしい緑の山に囲まれた、盆地だ。木立に囲まれた村の家々は、草葺きの屋根と、竹材を巧みに組み合わせた、高床式のしっかりした作りだ。戸数40軒ほどの家のうちで、中心部の15軒ほどが観光客を泊める「ゲストハウス」の看板を出していた。村はずれにいくほど、家は小さくって、観光客を泊める余裕はないようだ。観光客を泊める家は、どんどん裕福になって、所得の格差があるように思った。もともと、「ゲストハウス」を営業できる家は、村の中で裕福だったのだろう。

我々がお世話になった家は、アンさんの常宿で、かなり広く、部屋もたくさんあった。この家は村の中心的な「ゲストハウス」で、夜は民族舞踊の会を開催し、他の宿に泊まっている観光客も観に来る。

部屋の作りは、開放的だ。竹ひごのように細くさいたた竹を敷きつめた床と、天井のない屋根。家財道具は見えないところにはないので、広く感じる。たとえば、すだれのような床なので、下の地面が透けて見える。住んでいる人は、飲み残しのお茶などを、床の上に撒いて、捨てるので、たまげた。燃えさしのマッチ棒さえ捨てた。捨てたのは、年配の男性であったので、作法としては、良くないのかも知れない。女性は床に捨てたりしなかった。しかし、細かい塵、綿ぼこりは、自動的にすべて床下に落ちるので、電気掃除機メーカーは苦戦しそうだ。

村には電気と水道はある。風呂はないが、トイレと、シャワーが1部屋となった、別棟を利用する。シャワーは冷

水のみであった。水温はかなりぬるいので、冷たく感じない。温水を使わないのは経費のこともあるが、土地の文化なのだろう。

昼食代わりに、インスタントラーメン、を主食としたおやつをご馳走になった。インスタントラーメンは、高級な食材なのであろう。めいめい膳を大きくしたような、四角いちゃぶ台に食器を並べ、座って食べた。

家の人は、別の部屋を使っていた。そこには大型のテレビがあり、経済的に余裕がありそうであった。

もう夕方になってしまったが、村を一周。ニワトリや、アヒルなどが勝手に歩き回る、のどかなところであった。

■漢字のテスト

夕食は鶏肉、焼きそばなどを主体とした郷土料理。特に変わったものは、なかった。瓶に入れたどぶろくを10本ほどの竹のストローで刺して回しのみをするのが、ここでの客人歓待の儀式。この手の飲み方は、世界各地にあるようだ。味わってみるとほのかに甘い。

食後の団らんのなかで、アンさんから漢字のテストを仕掛けられる。紙に書いて問われた。

「この字の読み方と意味を知っていますか、前に案内した、日本の若い人たちは判らなかったです」

これは大変だ、我々の程度が判ってしまう。見ると、『客土』と『暗渠』とが書いてあった。皆さんどうですか？ 読めますか、意味を言えますか。中高年の我々ではできませんでした。

ああよかった、何とか皆で答えて面目を保った。もっとひねった熟語だと読めなかったかも。アンさんは、農業関係の本を読んだのか？ これが分からなかったので印象に残ったのであろう。彼のの日本語の読解力はかなりあるようだ。

■民族舞踊

食後のひときは別室でタイ族の民族舞踊を鑑賞。観



ゲストハウスの室内、居間兼食堂になる。風通しはよい。



宿泊したゲストハウス。高床式で、床下は物置になっているが、昔は家畜を入れた。

光メニューの一環だし、土地の人の手頃な現金収入アルバイトになるので、観ることにした。料金は1人100,000ドン(約800円)。

開始時間の9時頃になると、10人ぐらいの男女の若者が集まり、空き部屋の陰で身支度。他のゲストハウスに泊まった、韓国人のグループや、白人の観光客も集めた。素朴な歌や踊り、締めくくりはバンブーダンスで夜は更けた。

■久しぶりの蚊帳

寝るときは蚊帳を吊ると聞いていた。私のイメージだと、蚊帳とは一つの大きな蚊帳を、部屋いっぱいに吊るものと考えた。ところがここでは、2人用の小さい蚊帳を並べて吊るようになっていた。なるほど、この方が合理的だ。寝具は、上下とも薄物で、熱帯対応であった。

窓は開け放しであったが、宿の主人が盗難をしきりと心配して、閉めるようにと進言するので、締めて寝たが、もともと開放的な部屋なので、寝苦しくはなかった。

朝になると、暗いうちから起きて散歩に出た。村を出て、田圃の道を隣の部落へ向かった。よく手入れされた、水田が両側に続く。10分ほど歩くと小川を渡る橋があった。コンクリート製の、平凡な橋だが、脇にベトナム、日本両



日本の援助で作ったコンクリート橋と、立派な記念碑。

国の国旗をあしらった石碑があり、文面は1998年に日本の援助で作ったという意味らしい。ずいぶん奥地まで日本の息がかかったものがあると感心したが、石碑が立派な割には、橋は大したことがない。この程度の橋にも、いちいち記念碑を建てなければならないベトナムの苦勞を感じた。1940年代から1975年までのフランス、アメリカとの戦い。そのあとも、カンボジア、中国との戦闘で国力は疲弊しつくし、財政は火の車だろう。小さな橋でも、各国の援助が頼りだったのだ。

橋を渡ると、川岸に村のサッカー場があり、サッカーがさかんなことがしのばれた。道の先には山を背にした小さな部落があった。付近の家は、ゲストハウスのあるラック村と比べると家は小さく、

造作も見劣りがする。暮らしは楽ではないようだ。しかし、すれ違う村人は、私のような観光客にもにこやかで、礼儀正しい。牛を追いながら通り過ぎた、中年の男性は、戦傷であろうか、体が不自由であったが、にこやかであった。牛の首に、みやげ物屋で売っているものと同じ、竹製のカウベルが付いていてほほえましかった。

宿に戻り朝食の後、アンさんの案内で、隣の村まで散歩。部落の道端には、自作の民芸品を並べた露店が点在する。店番の1人は、昨夜見た顔だった。ゆうべは民族舞踊の芸術家の顔をしていたが、けさは商人の顔になり、売り子になっていた。どの店もあまり売れている様子はなかったが、ハノイに卸すので、ここであまり売れなくてもよいとの説明。

隣村まで徒歩30分ほどの距離であるが、そこは建物の様式がラック村とは微妙に違って、多民族を実感した。訪ねた家では、老戦士の話聞いた。ベトナムでは、ホーチミンと共に戦った経歴があると、尊敬される。この家でも、老戦士の賞状や若い頃の軍服姿の写真が飾られていた。彼が子供の頃には日本軍とも遭遇したという。幸いその時の日本軍は、移動中で、悪いことはしなかったようだ。

時間つぶしのようなとなり村訪問の後、徒歩でラック村に戻った。このあと、10時過ぎ再びバイクを連ねて、村をあとにした。

■バランスの取れた発展をねがう

我々のような観光客が駆け足で観ただけでも、ベトナムの人々の暮らし向きは多様なことがよく分かった。観光客と縁のないもっと僻地に暮らすベトナム人に思いをはせれば、彼らは言葉も違うし、生活習慣、価値観も違う。テレビで都会の生活を観てしまえば、自分たちの暮らしとの落差に気づくであろうから、社会の不安定要因になる。しかし新しい仕事に付くには、教育や、訓練が必要である。ベトナム人の叡智でそのあたりをうまく乗り切るように願っている。